

多文化を	ささえる	人びと
------	------	-----

ことばに仕事をあたえる

多言語センターFACIL

阪神淡路大震災のあとに始まった多くの外国人支援活動にユニークな組織が加わった。多言語センターFACILは、ことばの翻訳・通訳サービスに適正価格をつけることで、外国人支援組織の運営基盤を固め、同時に移民のことばに資産的価値を創出する

しょうじひろし
庄司博史

民博 民族社会研究部

言語学・言語政策論。2004年に特別展「多
みんぞくニホン」を企画した。近年は移民言語
や多民族化の諸現象に関心をもちている。共
編著書に『多みんぞくニホン』(2004年)、『
事典 日本の多言語社会』(2005年)など。

一九九五年の阪神淡路大震災は、民間の外国人支援活動にとって大きな転換期となった。震災をきっかけに、情報不足にあった多くの外国人の存在が浮かび上がった。

日本人でさえとまどう混乱のなかで、なにが起ったのかも、どこに支援があるのかもわからぬまま、多くの外国人が不安の真つただなかにあった。これにいち早く救いの手を差し伸べようとする動きがはじまった。民間のボランティアの人たちであった。震災の中心地神戸市でも、いくつもの善意が形となってあらわれた。

神戸市西部に位置する長田区周辺は、地震のダメージのもっとも大きい地区のひとつであった。下町にあるカトリック鷹取教会(現・たかとり教会)周辺も多くの家屋が倒壊し燃え落ち、避難場所や情報を求める被災者であふれた。教会とかわりあつた周辺のベトナム人の多くも、

その中に含まれていた。多言語センターFACILの創設者吉富志津代さんは、たまたまそれまで参加していた教会でのボランティア活動が縁で被災した外国人とかわり、救援にのめりこんでいった一人である。

情報難民を生み出すことばの壁

震災後の復旧が進み、当面の生活環境が整うなか、外国人の抱える深刻な問題が明らかになった。彼らの多くは日常生活において社会にほとんど注目もされず、生活情報から切り離された人びとであった。主な原因は不十分な日本語能力にあった。日々の暮らしに悩まれる彼らには、学生のように日本語学習に費やす時間や経済的余裕はあまりない。役所の提供する保健や医療サービス、子どもとの連絡のやりとりで不自由する人は少なくない。

FACILの設立は、それまでの外国人支援活動の空白を補うものであった。

九〇年代に入り外国人の増加とともに、行政の広報や案内などの多言語化のニーズがたかまり、個人が申請書などさまざまな書類の翻訳を必要とする機会も多くなった。しかし、ベトナム語、タガログ語など、日本でなじみの少ない言語を請けおえる翻訳・通訳者は皆無に近く、いたとしても法外な費用がかかった。やむをえず依頼した結果、間違いだらけの仕事がもどったこともあった。依頼者側にも問題があった。営利目的でないという理由でタダ同然で依頼

できるという誤解は根強いものであった。

移民言語がささえる コミュニティ・ビジネス

吉富さんは、このような需要をベースに、外国語能力を活用した翻訳・通訳サービスをたちあげ、それをコミュニティ・ビジネスとして育てようとした。外国人にとっても、日本社会から援助をうけるばかりではなく、社会参加しながら自立できるという自信につながりうる。外国人を支援する組織にとっても、経済基盤を確立できる可能性を示す機会でもあった。それまで数々あった支

震災後、各地でこうした外国人を支援する組織が生まれ、自治体にも多言語による行政サービスの動きが見えはじめた。鷹取救援基地と呼ばれたカトリック鷹取教会の敷地にも外国人を支援しようとする人びとがあつまり、多様な活動がなれば手探り状態で展開しつつあった。多くの人にとって、ボランティア活動自体はじめての経験であったし、多言語ラジオ放送、多言語による医療相談や生活相談など、ほとんどの事業はかつて存在すらあまり知られていないものであった。そのひとつに、吉富さんが一九九九年の創設以来かわっている多言語センターFACILがある。

移民とともに増える 移民言語の通訳・翻訳の需要

FACILの主な活動は、一口でいうと外国語の通訳や翻訳事業である。このようなサービスをおこなう援組織は、善意とはいえ、マネージメントを他からの援助に依存したために、現われては消えるという現象を繰り返してきた。

当初、それまでの活動でかわつた人びと七、八〇名に登録してもらいスタートした事業は、現在登録者約五〇〇名、対応可能な言語はネパール語やビルマ語など二八にのぼる。これらのネイティブ話者も少ない。ほそぼそとはじめた事業ではあったが実績は伸び、いまや民間の業者にも大いに意識される存在となった。

設立から一〇年を経過し、多様な分野の仕事に対応するなかで翻訳を

業者はかねてからある。しかし出発点からFACILには大きな特徴があった。それは外国人住民とともに多民族化する地域社会の需要に応え、ことばをこえた情報や意思の交換を促進すること、そしてこれを外国人支援の立場からおこなうことを設立の趣旨としたことである。



2007年に改築される前のたかとり救援基地とたかとり教会

被災地で暖をとる鷹取救援基地関係者



地域で暮らすうえで必要な情報を各国語で提供する事業にも協力してきた



震災後に開設した多言語ラジオ放送でスペイン語放送を担当する吉富志津代さん

専門とするにまで育つた人もいる。それでも業者が扱わない個人の小口の依頼も比較的安価で受けてきた。今も約三分の一はそのような用件がしめる。吉富さんによれば、その路線はFACILの根幹でもあり、譲るつもりはない。利益追求を優先するNPOにはなりたくないという。課題がないわけではない。いまや鷹取の外国人支援組織統合体のなかで財政基盤も強固になり、多くの活動を支える使命も果たしている。しかし外国人支援活動への社会や人びとの理解や援助はまだ十分ではない。吉富さんも、社会が直接そのような活動をささえることを理想とするが、それが実現するまでFACILの担う役割は重要だ。

FACILの活動がいかに画期的であったか。まず、外国人の自立を支援するコミュニティ・ビジネスを目指していること、そしてマイナー言語の翻訳・通訳サービスに適正価格をつけたことである。これにより日本では話者にも軽視され日陰の存在であった移民言語に、いくばくかの資産的価値を創出した。かれらの子どもたちに自信をあたえる可能性に注目すべきである。

多様性の保護をただ叫ぶより、仕事を用意するほうがよほど活力につながることは、移民のことばについてもいえるようだ。

*詳細情報は <http://www.tcc117.org/facil/> をご覧ください